

日本人が初めて見たポリネシア人

著者	石川 榮吉
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	59
ページ	68-78
発行年	2006-02-24
URL	http://doi.org/10.15021/00001607

6 日本人が初めて見たポリネシア人

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 6 日本人が初めて見たポリネシア人 | 6.6 日本人最初の接触者 |
| 6.1 日本における世界地誌とオセアニアの記述 | 6.7 『環海異聞』 |
| 6.2 『采覧異言』における記述 | 6.8 津太夫たちの目に映ったマルケサス人 |
| 6.3 オーストラリア大陸の発見 | 6.9 ハワイ島民についての記述 |
| 6.4 『訂正増訳采覧異言』 | 6.10 ジョン万次郎のみたハワイ島民
おわりに |
| 6.5 『坤輿図識』 | |

今から数十年前、私が人類学を勉強し始めた当時は、今日、太平洋のモンゴロイドといわれているポリネシア人は「人種的にはモンゴロイドではなくコーカソイドであり、そのうち地中海系の人種である」という説が有力であった。その後私は、1962年にはじめてポリネシアの学術調査に出かけてポリネシア人に出会うと、体格がすばらしくよく、ヨーロッパ人と接触してから混血がたいへん進んだためもあって、ヨーロッパ的な風貌をしている人を多くみかけた。それで、「なるほどポリネシア人はコーカソイドか」というような思いをしたものであった。

その後、自然人類学の研究がたいへん進み、今日ではポリネシア人、ミクロネシア人は紛れもないモンゴロイドであるとされている。ポリネシア人がなぜコーカソイドと考えられていたかについては、1991年刊の片山一道氏の『ポリネシア人』（同朋舎出版）という本のなかに詳しく説明されているので関心のある方はその本をご覧ください。

世界地図をながめれば一目瞭然、わが日本列島はアジアとオセアニアの接点に位置している。歴史的にみると、日本人は非常に古い時代から西のアジア大陸、南の東南アジア島嶼部とは、時代と地域によって濃淡の差はあるにしても、かなりの交渉をもってきた。ところが、東および南のオセアニア諸地域とは、交渉といえるほどのものをもたず関係が非常に希薄で、オセアニアと日本人が関係をもつようになったのは、この200年ほどのことにすぎない。

伊豆諸島や南西諸島と本州、九州とのあいだの海上交通の歴史は、いわゆる先史時代にまでさかのぼるといわれているが、そうした航海者のうちには、漂流のはてにオセアニアのどこかの島に漂着したものがいなかったとはいえない。しかし、文書記録はもとより考古学的にもはっきりした証拠は、これまでのところ知られておらず、オセアニア人のわが国への渡来の証拠についても同様である。

考古学上のことはさておき、明治前の文献にみるかぎり、オセアニア人の渡来・漂着

の記録は皆無といってもよい。わずかに『古今著聞集』（建長6年、1254年）に、承安元年（1171年）の出来事として、あるいはそれかと思われる記事がみられるが、これとても確実ではない。

この200年間、日本人は太平洋の人たち、なかんずく太平洋のモンゴロイドといわれているポリネシア、ミクロネシアの人たちをどのようにみてきたのかについて、これから紹介することにしてしよう。

6.1 日本における世界地誌とオセアニアの記述

江戸時代にはいってほどなく日本は鎖国体制を敷き、オランダ人と中国人を除いては外国人との接触がなくなる。それにもかかわらず江戸時代には世界地理に関する書物がかなり多く著述されている。それらの書物のなかには木版刷りで印刷され、読者をかなり広く獲得したものと、写本の形で次から次へと伝写されて流布したものがあつた。

世界地理を扱った日本最初の地誌といわれているのは、長崎の西川如見が著した『華夷通商考』で、これが編述されたのは17世紀末、1695年のことである。その増補版が18世紀初頭の1708年にだされている。著者の西川如見には海外にいった経験はまったくない。彼が世界地誌を書くに当たって利用した情報源の一つは、中国から輸入された『職方外紀』という漢籍で、その著者は艾儒略（がいじゅりゃく）という中国名をもつが、実は本名ジュリオ・アレーニというイエズス会のイタリア人教師である。中国人になりきって艾儒略という中国名をもち、中国語で『職方外紀』という世界地誌を著したのである。それが中国から長崎にはいり、西川如見の種本の一つになった。これと、長崎に来港するオランダ人からえたいろいろな情報をもとにして世界地誌を編纂したというわけである。

当時のヨーロッパには、世界の南方に延々と東西に広がってのびる巨大な大陸「テラ・アウストラリス・インコグニタ（未知の南方大陸）」があるという伝説があつた。これは古代ギリシアのプトレマイオス時代からヨーロッパ人の間に根強く信じられていた伝説である。そのテラ・アウストラリス・インコグニタを中国人はメガラニカ（墨瓦蠟尼加）と呼んでいるが、このメガラニカというのは、最初に世界周航をしたマゼランの名前からきている。『華夷通商考』のなかにもこのメガラニカの記述がある。

しかし、そのなかにはオセアニアに関しての記事はまるっきりといってよいほどでない。唯一、「日本の東の海に無福島という島がある」という記述があるだけである。マゼランは1520年から21年にかけて太平洋横断をおこなうが、そのときに彼は食糧と水の欠乏でたいへんな苦勞をする。太平洋のまんなかでようやく島を発見して、そこに船を近寄せ、何とか食糧補給をしようとするが、おそらくサンゴ礁だったのであろう、上陸してみても何もないう島で、虚しく去るほかはなかつた。その島のことが『職方外紀』に無福島という名で書かれており、西川如見はそれを読んで写しているだけである。

6.2 『采覧異言』における記述

西川如見と並んで日本で編まれた世界地誌のごく初期のものとして有名なのは、新井白石の著した『采覧異言』（享保10年、1725年）である。白石はたいへんな碩学なので、いろいろ和漢の文献に当たっていたと思われるが、彼の最大の情報源は、1708年に大隈の国、屋久島に潜入したジョバンニ・バッチスタ・シドッチというイタリア人のパテレン（キリスト教宣教師）であった。彼はちょんまげを結って着物を着て日本人に化け、首尾よく日本にはいりこんだと思ったのであるが、忽ち化けの皮が剥げて捕まり、江戸に送還された。そのシドッチに白石が面接をして糾問した際にキリスト教事情を詳しく聞き取り、それを『西洋紀聞』（享保9年、1724年）としてまとめた。

この『西洋紀聞』はキリスト教について書かれた書物であるから、キリスト教を禁教にしている江戸時代においては公表するわけにはいかない。幕府の書庫奥深く納められ、私ども一般人が『西洋紀聞』をみることができるようになったのは明治15年になってからのことである。それに対して、『采覧異言』はキリスト教事情ではなく、シドッチから詳しく聞きただした世界地理を記したもので、全5巻からなり、上梓されることはなかったが、写本の形で広く読まれたようである。

この『采覧異言』と『華夷通商考』の大きな違いは、メガラニカと呼んでいた未知の南方大陸が『采覧異言』では消えている点にある。当時のヨーロッパではテラ・アウストラリス・インコグニタの存在が、まだまったく否定されるにはいたっていなかったが、白石はその存在を怪しいと考えていたようで、実証主義の立場から怪しいものはとりあげないというわけで、メガラニカを削ってしまう。新井白石がとりあげている世界の大陸はヨーロッパ、アフリカ（新井白石はリビアと呼んでいる）、アジア、南アメリカ、北アメリカの五大州で、オセアニアはまだあらわれていない。

オーストラリア大陸への接触は、西から接触してきたオランダ人と東から接触してきたイギリス人の2通りがあり、当初は一つの大陸とは考えられていなかった。一つの大陸であることが実証されたのは19世紀の初めのことで、1803年、フリンダースがオーストラリア大陸をはじめて周航し、一続きの大陸であることを実証してからのことで、それまでは西と東とは全然別だと考えられていたのである。

白石が書いた当時、ヨーロッパ人はまだ東のほうは知らず、オランダ人が見出した西側だけしか知らない。その西側のオーストラリアを、白石はラランデヤノラバと片仮名表記している。ニューホランド（新オランダ）という意味でオランダ人がつけた名称である。

白石はまた、ニュージーランドのこともとりあげ、ゼイランデヤノラバと呼んでいる。ニューギニアについても触れているが、ニューギニアは新オランダと陸続きであると記述している。

このように実質的には若干とりあげられているが、オセアニアとしてまだ独立させら

れるにはいたっていない。しかも、とりあげたといっても地名をあげているだけで、地誌的な記述や民族誌的な記述はほとんどないのである。

6.3 オーストラリア大陸の発見

このように、オセアニアに関しては情報が乏しかったわけであるが、これはいうまでもなく、西洋人がいうところのいわゆる大陸発見時代において、オセアニアの発見がもっとも遅れたためにほかならない。

ここで発見という言葉を使ったが、オセアニアには非常に古い時代から人間が住み着いているのであるから、人類史的な意味で発見という言葉を使うことは間違いであるが、西洋人の立場からみてということで便宜上使うことにする。

オセアニアの地理的な輪郭がほぼ明らかになるのは、イギリス人ジェームズ・クックによる太平洋探検航海の成果をまっけてからのことである。1768年～79年までの約10年のあいだに、キャプテン・クックは3回の太平洋探検航海をおこなっている。その結果、太平洋の地理的な全貌というといひすぎになるうが、オセアニアの輪郭がおおよそ明らかになった。そして、クックが第2回目の探検航海で未知の南方大陸、テラ・アウストラリス・インコグニタが存在しないことも実証されたのであった。

クックは1768年から71年にかけての第1回の探検航海でオーストラリア大陸の東海岸をヨーロッパ人としてはじめて見た。オランダ人は1616年以降たびたびインド洋側からオーストラリア大陸に接触し、クックは東側からオーストラリア大陸にはじめて接触したわけであるが、一つの大陸であることが確認されたのは、前述したように1803年のことであった。

6.4 『訂正増訳采覧異言』

ヨーロッパ人のあいだに太平洋および太平洋諸島が知られたのがたいへん遅かったため、ヨーロッパで刊行された地誌のなかにもオセアニア関係の記事は遅くまででてこない。したがって、それらを直接、間接に種本にしている日本で編纂された世界地誌にも、オセアニア関係の記事はながらくでてこない。それがようやく現われてくるのは、江戸時代も終わり近くになってからのことで、山村才助が著した『訂正増訳采覧異言』（享和2年、1802年）がその先駆である。山村才助は土浦藩士で、当時の有名な蘭学者、大槻玄沢の門下で俊才といわれ、オランダ語に堪能であった。

大槻玄沢は幕末の大蘭学者といわれ、仙台藩の御殿医でもあった。彼は江戸で蘭学塾を開き、そこに入門して蘭学を学んだ山村才助が、新井白石の著した『采覧異言』をもとに、誤っている部分を訂正し、足りない部分をオランダ語の世界地誌にあたって翻訳して補足したのが『訂正増訳采覧異言』である。

この『訂正増訳采覧異言』も上梓はされなかったものの、伝写されて当時の知識人の

あいだに多くの読者を獲得し、「幕末の思想界に大きな足跡を残した」（鮎沢信太郎）と評される大部の世界地理書である。幕末期に活躍した吉田松陰の愛読書の一つであったし、国学者の平田篤胤も『訂正増訳采覧異言』を愛読していて、こんなすばらしい本はないと手放しの絶賛をしている。

当時は一般に、自分が使用した文献の引用書目を具体的にあげることをしなかったが、山村才助は参考にした文献を一覧表にして掲げている。それによると、彼は自分が参照した本として洋書32種類、漢籍が41種類、それから日本人が書いた和書が53種類、合計126種類の書物をあげている。洋書はオランダ語の本ばかりであるが、その32種類は残念ながらすべて17世紀中葉までの、ヨーロッパ人もオセアニアについてほとんど知らなかった時代の文献ばかりなのである。したがって、山村才助の『訂正増訳采覧異言』においても、そのほかの地域についてはずいぶん充実しているものの、オセアニア関係の記事だけはあいかわらず乏しい状態にとどまっている。それでも、アジアもしくはアメリカに付随して、オーストラリア、ニュージーランド、パプア、ニューギニア、ソロモン、エスピリツサント、タスマニア、ファンフェルナンデスに言及している。新井白石よりも多少ふえてはいるが、ただし、これも地名をあげるだけで、地誌的もしくは民族誌的記述がほとんど見られない点では白石に変わらない。

6.5 『坤輿図識』

クックの成果がもりこまれ、オセアニアが独立した世界の一州としてとりあげられるのは、幕末期も近い弘化2（1845）年に刊行された箕作省吾の『坤輿図識』においてである。

箕作省吾はもともと奥州水沢藩の出身で、若いころ長崎に留学したことのあるオランダ語のできる人について、子供のころからオランダ語を習い始め、その後江戸にでて、当時の大蘭学者である箕作阮甫の塾に入門して、オランダ語を本格的に学んだ。彼も山村才助に劣らぬくらいの俊才で、箕作阮甫に見込まれて養子になるが、気の毒なことに結核を病んでたいへん若くして亡くなってしまった。

この『坤輿図識』において、省吾は19世紀前半に著されたオランダ語文献を利用して、山村才助に比べて150年から200年も新しい世界地理学の知識をとりいれたわけである。そのため『坤輿図識』には、オセアニアが豪斯多辣利洲（アウスタラリ洲）の名前ででてきている。そこにはオーストラリア、タスマニア、ニューギニア、ニューブリテン、ソロモン、ニューカレドニア、ベラウ（パラオ）、ニュージーランド、トンガ、ソサエティ、マルケサス、ニューヘブリデス、ハワイの地誌もしくは民族誌が叙されている。

サモアやフィジーなどの重要な島々で脱落しているものがあるし、メラネシア、ポリネシア、ミクロネシアといった、今日常識的な地域区分もみられない。もっとも、この3

地域区分は、当時の西洋の地理学でもまだ確定をみていなかったのであるから、これは省吾の責任ではない。

『坤輿図識』が描くところのオセアニアの地誌的ないし民族誌的叙述には、正・誤両様の情報がもられている。例えば、気候について、ニューカレドニア島を「炎熱燬クガ如シ」、ニュージーランドを「氣候総テ寒」とするように、気候にかぎらず、自然と文化の双方にわたって、誤りはけっして少なくない。しかし、全体としてみると、正しい、あるいはほぼ正しい情報がずっと多いとしてよい。たとえば、人種特徴について、ニューギニア人は「土人種族一ナラズ、多クハ面色黯黒ニシテ、脣上掲起シ、明堂扁闊、眼口巨大、毛髮総テ漆黒」、またソロモン諸島人については「土人強健ニシテ、皮膚銅色、ヤヤ黒ヲ帯ブ」としているのに対して、ニュージーランド人（マオリ族）は「土人身材肥大、顔面褐色」、トンガ諸島民は「土人面色銅褐」、そしてソサエティ諸島民も「土人面色褐黄」というように、多くの場合、今日いうところのメラネシアとポリネシアで住民の皮膚の色が異なるものとして述べている。

さきにも触れたように、当時は、まだメラネシア・ポリネシアという地域区分はなされておらず、そして、省吾自身メラネシアの人びともポリネシアの人びとも目にしたわけではなく、すべてが蘭書からの借り物の知識にほかならない。しかし、そうであっても、オセアニアに大別して、黒もしくは黒みがかった肌の人びとと褐色の人びとの2種類の人間がいることを知り、それを紹介しているわけで、これなどは正しい情報といってよからう。

ところで、この褐色の人びとというのは、いうまでもなくモンゴロイドのことを指している。省吾はもちろんモンゴロイドなどという言葉は使っていないし、知りもしない。しかし、書物上の知識として、その存在に初めて触れたわけである。書物上でオセアニアのことを多少ともまとめて日本人に紹介されたのは『坤輿図識』をもって嚆矢とし、それ以前は日本人はオセアニアのことは書物上でもまったく知らなかったといってもさしつかえない時代であった。約150年前になってようやく、書物上の知識としてオセアニアの島々のことが日本人のあいだに知られるようになってきたわけである。

6.6 日本人最初の接触者

ところが、箕作省吾より40年も昔に、ポリネシア人、つまりオセアニアのモンゴロイドに実際に接触した日本人がいたのである。それより前にも接触した人がいたかもしれないが、記録に残るかぎり、ポリネシア人を見た最初の日本人というのは、仙台藩の漂流民、津太夫ら4名で、文化元（1804）年のことである。

石巻に船籍のあった若宮丸という800石積24反帆の船に、津太夫は仲間たちと16名で、仙台藩の廻米1332俵その他を積み込んで、石巻から江戸へ向かう途中、寛政5（1793）年12月2日、福島県塩屋崎の付近で暴風雨に見舞われて漂流に陥り、5ヶ月余りの漂流の末、

アリューシャン列島のアツカ島に漂着した。ここで島民に救われ、当時あのあたりに勢力を扶植していたロシア人の手によってイルクーツクへ護送され、そこに8年あまり滞在。その後さらに西へ進み、当時のロシアの首都ペテルブルクへ送られる。それまでにすでに6名が病死もしくは病気のために脱落し、ペテルブルクまでたどりついたのは10名であった。

当時、ロシアは日本との通商を望み、先にアダム・ラクスマンを使節として送ったが、今回はニコライ・レザノフを遣日使節として、クルーゼンシュテルン提督のロシア軍艦ナデジュダ号派遣することにした。その際に、津太夫たち漂流民の送還を取引手段にしようとしたのである。

ところで、当時は鎖国時代であるから、まったく不可抗力の漂流であっても、海外にでた者は帰ってくるたびしい糾問をうける。それを恐れて10名の日本人のうち6人はロシア残留を望み、帰国の勧めに応じたのは津太夫ら4人であった。

この4人をレザノフとともに日本に送り届けるナデジュダ号が、ロシアのクロンシュタットを出帆して大西洋を斜めに横断し、南米の南端を回って太平洋にはいり、北西に進んでカムチャッカにいたり、さらに南に下がって長崎に入港する。その途中で、ポリネシアの東縁のマルケサス諸島のヌクヒヴァ島と、ハワイ諸島のハワイ島とに立ち寄り、それで津太夫たちはまったく偶然に、日本人としてはじめてポリネシア人を目撃することになったのである。文化元（1804）年のことであった。その記録が幸いにして残っている。

6.7 『環海異聞』

その記録の一つは、津太夫ら4名が帰国したときに長崎奉行所で厳しい取り調べを受けた際の訊問調書（当時「口書」と呼んでいた）で、それには漂流の顛末からロシアでの生活、途中でみたマルケサス諸島、ハワイ諸島事情などがかなり詳しく述べられている（国書刊行会 1913: 157-179）。

もう一つ、長崎奉行所での取り調べ後、4名を仙台藩士が長崎まで引き取りにきて、仙台藩の江戸屋敷で本格的な事情聴取がおこなわれた。これは取り調べとは違い、当時は海外情報の乏しい時代であるから、漂流民がみてきたところをこと細かに聞きだして、記録にとどめるという海外情報の収集が目的であった。仙台藩の蘭学者大槻玄沢が聞き取りをして編纂し、藩公に献呈した全15巻の『環海異聞』（文化4年、1807年）がそれである。

漂流民はロシアに9年も滞在したため、ロシア事情がもっとも細かに書かれている。帰りに立ち寄ったマルケサス諸島とハワイ諸島事情については第13巻に述べられているにすぎないが、それでも、それをみると結構よく観察している。

ナデジュダ号はヌクヒヴァ島に1804年5月7日から18日まで、正味11日間碇泊している。

この間、津太夫たちは主に艦上で、物々交換のために、泳いだりカヌーを操ったりして艦へやってくる島民を観察していた。言葉は全然通じないため、島の人と直接言葉を交わすということはできず、観察するだけである。津太夫たちはロシア語はできたため、他のロシア水夫から情報をえることもあった。しかし、ロシア人も島民と言葉が通じないことは、津太夫たちと同様であった。

ところが、偶然にもマルケサスにはビーチコウマーが2人いたのである。ビーチコウマーというのは、前述したように当時太平洋で捕鯨船などに乗り組んでいたヨーロッパ人の船乗りで、脱走して島に逃げ込んだ連中のことを言い、そのビーチコウマーの2人のうち1人はイギリス人、もう1人がフランス人であった。この2人がいたことは『環海異聞』にも『口書』にも記述されている。

当時のロシア人にとって、フランスはあこがれの的であり、そのため上流階級の人たちはみんなフランス語ができる。また、クルーゼンシュテルン艦長は航海術を学ぶため、若いころイギリスに留学した経験があるので英語もよくできた。であるから、クルーゼンシュテルンにしても、同行していたドイツ人博物学者ラングスドルフにしても、情報源にはこと欠かなかったわけである。ビーチコウマーから聞き出して遺した彼らの航海記には、マルケサスの民族誌が非常に詳しく描かれている (Krusenstern 1810-1812; Langsdorff 1812)。

それに対して、津太夫らはただ観察するだけであるから、『環海異聞』をロシア側の記録と対比してみると、詳しさという点では当然のことながらロシア側の記録に劣るが、ロシア側に欠けている事実を記載している例も少なくないのである。ごく簡単な例をあげると、腰蓑についてロシア側の記録には一つも触れられていないのに、『環海異聞』や『口書』には、島民の女性が腰蓑を巻いていたと記述されている。日本には横文字崇拜の風があるので、普通はロシア人の書いたほうが正しく、『環海異聞』の記述は嘘だろうと思うかもしれないが、同時代のほかの史料をみると、マルケサスに腰蓑があることは間違いない。

もう一つ、当時のハワイの女性はサンゴ石灰を砕いて、それに水を加えてこねて、化粧として前髪に塗る習慣があった。それで前髪が白くなっていたと日本側は記録している。ところが、ロシア側はそのことにもまったく触れていない。そのように、量的には少ないものの、ロシア側が見落としたことで日本側に記述されていることも結構ある。

6.8 津太夫たちの目に映ったマルケサス人

次に、津太夫らの目に映じたポリネシア人の姿、なかんずく身体特徴をみていくことにしよう。

津太夫たちは、マルケサス人の皮膚の色には触れていないが、身長については「男の丈七尺余」と述べている。七尺余というのはメートル法に換算すると約212cmとすこぶる

巨大になってしまう。当時のポリネシア人成人男子の平均身長は172cm、マルケサス人は170.3cmという自然人類学者の計測値がある。それに比べると、212cmというのはいかにも大き過ぎる。しかし、江戸時代の日本人男子平均身長は157cmだったといわれており、低身の日本人の目にはマルケサス人の男はそれこそ雲を突くような大男に映ったのであろう。そこで、七尺余という表現になったのではないかと思われる。大男であるだけに力量もなみなみならぬものがあり、艦への水の補給に際して「大いなる桶へ湛へたる水、此方の人、2~3人にて運び入るゝ物を、島人は一人にて擔げ入れたり、其力量はかり知るべき也」と感嘆している。

それから、皮膚の色に触れていないのはどういうわけか考えてみよう。マルケサス人は、全身を掩いつくす入墨で人類学者のあいだで有名である。男性は頭のとっぺんから足の裏まで、誇張ではなく、人身に入墨を彫る。頭をそって脳天から彫り始めて、顔一面、臉にも彫り、唇にも彫るし、口を開けて歯茎にも彫る。肩から背中、腹と彫って、足の裏、指1本1本すべてに入墨を施している。そのため、ヨーロッパ人の書いた同時代の記録をみると、「全身を彫ってしまっているので遠くからみるとマルケサス人はアフリカの黒人のように真っ黒に見える」と書かれている。津太夫たちも「頭面より総身手足の端に至て、彫物入墨をなし」と語っている。こうした総身入墨のために本来の肌の色がわかりにくかったのか、皮膚の色についてはまったく触れなかったのであろう。

身体形質についてはこの程度の記述だけで、あとは衣服、髪型、住居、主食物、カヌー、遊泳能力、食人慣習といった民族誌的な事柄の記述に終始しているが、これらについてはここでは省略する。人間についてだけでとどめる。

6.9 ハワイ島民についての記述

次にハワイ島民についてみてみる。ナデジュダ号はハワイ島にはまったく碇泊することなく、島の南岸沿いに6月7日から10日まで遊弋するばかりで、物々交換のためにカヌーでやってくる島民と交渉するだけであった。島民が艦上にのぼってくることもないし、マルケサスに比べて日数もずっと短いので、記録はいよいよわずかである。しかし注目すべきことは、津太夫たちが「此島之人物面色等、日本人に差面変儀無之」とか「丈は日本人程あるべし」などと、ハワイ島民を日本人と似ているとしていることである。ハワイ人がモンゴロイドである以上、これは当然といえば当然のことながら、これは実際に目撃した者にはじめていいうことで、蘭書だけの知識の箕作省吾には望みうべくもなかったことである。それにしても、津太夫たちの観察眼の確かさには感心させられよう。

ハワイには、津太夫たちののちにも、かなりの日本人漂流民が訪れている。幕末近くになると太平洋捕鯨がさかんになり、大げさにいうとアメリカの捕鯨船が太平洋全域に展開するような状況になった。であるから、日本の漂流船でアメリカの捕鯨船などに救助されるものが非常にふえ、その漂流船の乗組員が必ずといってよいくらいハワイに連

れて行かれた。これは、ハワイから便船を求めて中国へ連れていくため、当時、日本と通交のあった中国から長崎に送還することを意図してのことであった。したがって、ずいぶん大勢の日本人漂流民がハワイの土を踏んでいる。

また、井伊直弼が無勅許で調印した日米通商条約の批准書の交換のために、万延元(1860)年、幕府が遣米使節団を派遣する。その人たちも万延元年にハワイに立ち寄っている。遣米使節団はアメリカが差し向けた軍艦ポーハタン号に乗ってサンフランシスコに向かうが、途中で大暴風雨に見舞われて船が破損したために急遽予定を変更してハワイに立ち寄ったのである。そしてポーハタン号に随行していた勝海舟を艦長とする咸臨丸も、サンフランシスコに直行した帰りにハワイに立ち寄っている。そういうわけで、遣米使節団の人たちがいろいろ書き遺した日記を見ると、そのなかにハワイ事情がでてくるのである。

なかには「ハワイ人というのは色が黒くてこれは黒人だ」というとんでもないことをいっている人もいるが、大多数の日本人が「ハワイ人は日本人と同じである。目の色も髪の色も皮膚の色も日本人と大差ない」と記述していて、これは若宮丸の津太夫たちの印象と変わりが無い。

6.10 ジョン万次郎のみたハワイ島民

その最たるものが有名なジョン万次郎が残した記録である。彼は漂流先の島島からアメリカの捕鯨船に救助され、天保12(1841)年にホノルルに運ばれてから嘉永4(1851)年に日本に帰国するまでのあいだに、アメリカで学校教育をさづけられたり、カリフォルニアで金山掘りに従事したほか、前後2回、アメリカの捕鯨船に乗り込んで、広く太平洋を航海している。その航海で、万次郎はポリネシアの島としてはハワイのほかにもサモアにも立ち寄っており、その際、注目すべきことに、彼はハワイ人を日本人と大差ないとするほか、ハワイ人もサモア人もアジア人と同じだと述べているのである(箭内 1970: 261-290)。

さらに、彼はミクロネシアのグアム島民についても「人物之事男女とも丈け常体顔色目色之様子差して日本に相替わらず」、「人物は亜細亜の人々に異り不申」と、的確に語っている。日本人とばかりいわず、アジア人と同じということにいたっては、モンゴロイドの語こそ用いないものの、万次郎は実質的にモンゴロイド人種の存在と、そのオセアニアにおける分布を認識していたというべきであろう。ただし、オセアニア人をすべてアジア人とみていたわけではない。万次郎はニューギニアにも立ち寄っているが、ニューギニアの人びとに対しては差別用語といえそうであるが、黒ん坊という言葉で呼んでいて、ハワイやサモア、グアムの人間とは違うとはっきり認識している。

万次郎については、最初の日・米のかけ橋としての評価が一般的のようであるが、ここに述べたような、人類学的な、あるいは人類学史的な評価もなされて然るべきだと思う。

おわりに

この稿で私が言いたかったことは、日本人が太平洋諸島の存在を知り、太平洋諸島民と接触するようになってから、まだ200年という年月しかたっていないということ、つまり、ごく新しい知識であるということ、それから江戸時代の日本人のなかには、はじめて接触したポリネシア、ミクロネシアの人たちを日本人と人種的に大差ない、なかにはジョン万次郎のようにアジア人の仲間であると認識していた人たちもいたということ、である。

冒頭に述べたように、私が人類学を学び始めたころ、ヨーロッパの人類学者はポリネシア人をコーカソイド人種であるといっていた。その点、江戸時代の日本人のほうがしっかりした観察眼をもっていたことになる。自分の実体験でポリネシア、ミクロネシア人は日本人の仲間であるにとらえていた。世に学者と呼ばれる人たちは大勢いるが、学者のいうことが常に正しいとは限らない。学者のいうことよりも素人の直観のほうが正しい場合もある、ということ結びにしたい。